法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-09

翻訳の正体

宗意, 和代

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
(巻 / Volume)
66
(開始ページ / Start Page)
51
(終了ページ / End Page)
61
(発行年 / Year)
2011-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007683

Hosei University Repository

翻訳の正体

社会学研究科　社会学専攻
国際日本学インスティテュート
博士後期課程２年　宗　意　和　代

はじめに

今「本」の世界は電子書籍の登場により過渡期にある。中世の修道院で作っていた羊皮紙の写本の時代から活版本になったとき、活版本を読んで済ませている人たちに対してオックスフォード大学の教師たちは「そんな汚いものには価値がない」と言ったという。けれど、その後の50年に、それまでの何百倍もの量の書物が出版されている。要するに人々のニーズがあったということである。媒体は変化しても読み物は残った。今も同じではないだろうか。電子であれ、紙であれ、人々の要求に応える内容であれば「本」は読まれ続けるはずだ。問題は中身である。筆者は長らく翻訳業に携わってきた者として、翻訳物の読者が減り続け翻訳不況とまで言われる昨今の状況を懸念している。だが一方で明治のころに初めて訳された古典的な作品の新訳版が次々に出され様々な批評を買いながらも読まれている事実に期待してもいる。翻訳物は原作者と翻訳者という二人の力からなるもので、読み方によっては、一人より二人の力の価値を謳歌できるものだと思う。今や世界の人口は70億人に近づいている。日本の人口は1億3000万人に満たない。単純に考えて、日本人が生み出せる本は、世界中の本の１／70くらい、ということになる。これは、日本人の著者が書いた本だけを読んでいると、面白い本に出会う確率が、１／70くらいに下がる、ということを意味する。どうしたら翻訳物がもっと読まれるようになるか。一つの翻訳物を題材に実際の翻訳者の仕事を追う中で今の翻訳物の課題と展望を考えてみたい。

１．原作について

本稿では、検討の題材として『小公女』という作品を取り上げる。『小公女』の題名で明治のころから今にいたるまで何度も訳され読まれてきた、常に少年少女向けの文学全集に名を連ねきた古典的名作でもある。セーラという少女が父の死によって裕福なお嬢様から一転、乞食同然の身の上となり辛い仕打ちを受けるが、やがて亡父の友人が現れ再び金持ちの世界に戻っていくという筋書きである。日本では健気に耐える少女が幸福になるシンデレラストーリーの印象が強い。原作はフランシス・ホジソン・バーネット“ A Little Princess ”(1905)(以降“ A Little Princess ”と記述する)だが、“ A Little Princess ”は、その約10年前に書かれた “ Sara Crewe or What Happened at Miss Minchin 's ”(以降“ Sara Crewe ”と記述する）を改訂したものである。オリジナルSara Creweが1887～88年に雑誌セント・ニコラスに連載され連載終了後の1888年に単行本として出版された後、著者バーネット自身の手で1902年英国（タイトル：A little un-fairy princess)、1903年米国（タイトル:A Little Princess）で劇化された。そして、その劇の成功を見て1905年に米国の劇と同じタイトル“ A Little Princess ”として出版された。この改訂は著者が主題の表現手法を変えることにより結果的に内容を成熟させたものとみられている（Holman, 1972, p167,361)。日本ではSara Creweが1893年若松賤子の手で訳され『小公女』のタイトルは若松によるものだが、その後は現代にいたるまで専ら“ A Little Princess ”の方が訳され読み継がれている。私たちが『小公女』として知るものは“ A Little Princess ”の翻訳である。

著者バーネットは1849年イギリスの工業都市マンチェスターに生まれた。バーネットは三歳で父を亡くした後、稼業が倒産し貧窮の果てに1868年に米国に移住し、やがて1886年“ Little Lord Fauntleroy ”(邦題：『小公子』)の大ヒットで人気作家となった。米国で人気作家となった後に英国に土地を借り見事な庭園つきの邸宅を構えており、“ A Little Princess ”とSecret Garden（秘密の花園）は、そこで執筆されている。米国に家族を残しながら頻繁に英国に渡り長期滞在したことから生涯祖国英国を思う英国人であったとも言われる。

Hosei University Repository

“ A Little Princess ”は英国ロンドンの学校の物語である。英国の学校については次のような見解がある。

> 学校物語というジャンルはイギリス特有のものである、なぜならイギリスの教育は階級問題に他ならないからだ。（ジョージ・オーウェル）
>
> 少なくともイギリスの教育は、今なお紳士気取りの風習にすっかりかぶれている。すなわち私立小学校では、生徒たちは学校生活の四六時中、階級意識を吸い込んでいる。そして教育、大体において国家の管理を受けているから、現状を守ることになるために、できるだけ若人たちの批判力を抹殺し彼らを危険思想に近づけないようにしなければならない。
> （バートランド・ラッセル）

オーウェルや ラッセルの言葉にあるとおり英国の学校は英国社会そのものであり、英国社会特有の階級の意識がそのまま露呈していた。現代においても、大人気作『ハリー・ポッター』の学校には人々の階級意識は歴然と示されている。

イギリスの特に児童向けの作品は比較的最近まで、もっぱら中流階級(ミドルクラス)の子どもたちのために書かれてきた。産業革命によって富みを蓄え、1832年の選挙法改正によって政治的権力を獲得した、この階級はイギリス帝国の興隆や制度の充実とつながる。19世紀の文学は彼らがつくったものとも言われ「イギリスの国民性は本質的に中産階級的」という見方もある。そして、その英国の学校については「イギリスの核心が中産階級なら、中産階級の核心はパブリックスクールという教育制度だが、この異様な制度はイングランド特有のものである。（E・M・フォースター）」とも言われる。そのため主に中産階級の子供を対象とする学校物語は、まずこの階級特有の価値観を打ち出すことで、子どもたちを啓蒙・教化しようという狙いもあった。

さて、『小公女』も学校物語である。これまで何人かの訳者のものを読んできたが、特に児童書として読んでいるうちは階級のことなど考えさせられたことはなかった。そこで、まず原作を読んでみた。すると、なるほど登場人物はいずれも、その所属階級がわかるように描かれている。もちろん「上流階級の」という具合に直接的に書かれているものばかりではないが人物描写の中にその所属階級を示す言葉が必ず存在した。邦訳を読んでいる限り全く気づかなかったものが、原作にあたれば、ほとんど一目瞭然だった。実際私たち日本人には英国人のような階級意識はない。だからニュアンスで読み取れないのは当然かもしれない。しかし原作にはきちんと言葉（英語）で示されている。原作に見えた階級を示す言葉はいったいどのように処理されたのだろうか。原作と邦訳の間で翻訳者はどのような仕事をしたのだろうか。

２．翻訳者の仕事

2.1. Business woman とWorking woman

階級を意識して原文をあたると、すぐさま、この二つの階級に関わる言葉が目に留まった。business womanはセーラを「いじめる」役の学校経営者ミンチン先生のことである。もう一方のworking womanはセーラを助けるパン屋のおばさんのことであった。それに気付くと悪のミンチン先生に対し善のパン屋のおばさんという対称性が見えてきた。邦訳ではなぜ気づかなかったのだろうか。原文といくつかの翻訳を確認してみる。

Business woman

> But she was a hard, grasping business woman; and, after the first shock of disappointment, had seen that 〜.（Sara Crew）
> 併し至って、薄情で欲張りで世才に長けた女でしたから、大きな当てが外れると見てから、早速に一と思案しました。（若松　1896）
>
> Miss Minchin was a business woman, and would be shrewd enough to see the truth. She could not afford to do a

Hosei University Repository

thing which would make people speak of her as cruel and hard-hearted.

ミンチン先生もなかなか目先のきくひとだと思っていたので、その道理に気がつくはずだと思った。自分が残酷な冷たい心の持ちぬしだといううわさをまきちらすようなことをするはずがない、と知っていた。（伊藤 1956）

ミンチン先生もまたなかなか世渡りじょうずな人だと見抜いていたので、その道理に気がつくはずだとかんがえた。（谷口 1985）

Then Mr. Carmichael explained-in the quiet, level-toned, steady manner of a man who knew his subject, and all its legal significance, which was a thing Miss Minchin understood as a business woman, and did not enjoy.

ミンチン先生は実務家としてその話をすぐ理解はしたが、喜びはしなかった。(川端　1961）

ミンチン先生も事業家ですから、よくわかったのですが、喜びはしませんでした。(中山　1993)

Working woman

I am a working woman, myself, and can't afford to do much on my own account, and there's sights of trouble on every side; but if you'll excuse me, I'm bound to say I've given many a bit of bread away since that wet afternoon, just along o' thinkin' of you. An' how wet an' cold you was, an' how you looked,-an' yet you give away your hot buns as if you was a princess." (Sara Crew)

わたしは御覧の通り貧乏暇なしと稼いで居るんで、自分の持ち出しじゃあ何も大したことは出来やしませんがね、(若松　1896)

I am a working-woman myself and cannot afford to do much on my own account, and there's sights of trouble on every side; (A Little Princess)

私に施しをさせて下さるなんて、うれしゅうございますわ。御覧の通り、私はほんのもうその日暮しで、自分の力ではとても大したことは出来ないんでございますの。気の毒な人はそこら中におりますのにね（菊池　1930）

ちなみに1930年の菊池訳ではミンチン先生のbusiness womanの箇所が省略されている。

いずれの訳にも階級は見えない。だが邦訳のみを見る限りは、違和感なく自然に感じられる。また特にbusiness womanの方は、訳出しなくとも問題がないようにも思える。だが、原作と比べると、まず登場人物の社会的立場による対比関係が見えない。また「善」役のパン屋のおばさんが労働者階級と意識すると、セーラの "Can I work?" she said. "If I can work it will not matter so much~（働かして下さいますの？　働けさえすりゃア、何もそう悲しかアありませんわ……(菊池　1930)という「労働」を喜ぶ場面とともに「労働」が好意的に書かれていることに気づく。そこで当時の「社会」を顧みると1881年に社会民主連合（Social Democratic Federation）が設立され、その指導者たちによって煽動された労働者の暴動が、1886年にロンドンで発生しているという事情があった(1)。そうしたことがわかると邦訳は読みやすくはあるが原作に示された社会性が消えているように思えてくる。。

2.2. ミドルクラスのRespectability（Respectable）

Respectabilityは英国の物語によく見られる言葉で、本来は「尊敬に値すること」「立派であること」の意味で

Hosei University Repository

中流階級の道徳的な指針であった。もとはビクトリア女王がこれを実践する生活信条を示したことから、中流階級が「尊敬に値すること」として道徳的指針としたものであった。だが作品が書かれた当時、中流階級の上昇志向は「分をわきまえない」ものとして上からは疎んじられ下からも軽蔑され、中流の上昇志向を示すRespectabilityの語は、外見のみ立派に見えるようにする虚栄の姿勢、「体面重視」という意味で中流階級を象徴する言葉となった。中産階級は社会的体面を保つため（＝for respectability）に、たとえば男性は収入を確保できるまで結婚を先延ばしにしたり、貧しくても使用人を雇い、派手な家具を置いたりする。‘ respectability ’ はそういう中流の虚栄心を象徴する言葉として用いられた。

作品の中でミドルクラスのミンチン先生対し、この意味でしばしば使われている。

> She was very like her house, Sara felt: tall and dull, and respectable and ugly. She had large, cold, fishy eyes, and a large, cold, fishy smile.
>
> ミンチン先生はこの家にそっくりだ、とサアラは思った。背が高くって気むずかしそう、で身じまいがよくって、美しくないひとであった。（伊藤　1956）
>
> ミンチン先生はこの家にそっくりだわ、とセーラはおもった。
> 背が高くって、いんきで、身だしなみがいいのに、みにくい人だった。（谷口　1985）
>
> "What a bed for a child to sleep in-and in a house which calls itself respectable!
>
> こんなベッドに寝かせるなんて。しかも、えらそうなことをいう学校のなかでさ！（中山　1993）
>
> とにかく、教育をしようという人間の家で、こんな寝台にこどもを寝かせるなんて。（伊藤　1956）
>
> とにかく教育事業だなんて言ってるくせに、なんというベッドに子どもねかしておくんだろう。（曽野2007）
>
> とにかく教育者でございっていう顔つきをしている人間の家で、こんな寝台に子どもをねかせておくなんて！（谷口　1985）
>
> 菊池　1927：該当箇所省略
>
> Sara often thought afterward that the house was somehow exactly like Miss Minchin. It was respectable and well furnished, but everything in it was ugly; and the very armchairs seemed to have hard bones in them.
>
> かなりきちんとしていて、造作などもよく出来てはいましたが、家にあるものは何もかもぶざまでした。（菊池　1927）
>
> 家の中は堂々として、立派な家具がおいてあったが、それはどれも醜かった。（伊藤　1956）
>
> たてものはどうどうとしていて、りっぱな家具がおいてあるのになにもかもみにくく見えるものばかりであった。（谷口　1985）

このようにミドルクラスのミンチン先生に対するrespectableは、1905年のA Little Princessにたびたび出てくる。だが、オリジナルSara Crewe or, What happened at Miss Minchin'sでは次のセーラに対するrespectableのみ、その意

Hosei University Repository

味は元のビクトリア女王の信条に由来する「立派であること」の意味で使われている。

> As you have the things and are to have new ones when they are worn out, you may as well go and put them on and look respectable; and after you are dressed, you may come downstairs and learn your lessons in the school-room."
>
> 着替えて来て、シャントしていたらよかろう。そうして、おまへ、着替えたら、下へおりて、講堂で自習するが好いよ。（若松　1894）

respectableの使用の変化は、ちょうど19世終わりから20世紀にかけて「ローアーミドルパッシング」が特に目立ってきた時代状況に比例する。

それは時代の異なる作品でみても明らかだ。1813年ジェーン・オースチンの“ Pride and Prejudice ”と1915年サマーセット・モームの“ Of Human Bondage ”の二つの英国作品にもrespectableの語はたびたび出てくるが、1915年『人間の絆』のrespectableは完全にミドルクラスにあてたものである。

> They were of a respectable family in the north of England; a circumstance more deeply impressed on their memories than that their brother's fortune and their own had been acquired by trade. (“ Pride and Prejudice ” 1813)
>
> イングランド北部の相当の家柄の出で、それが彼らの記憶に深く刻み込まれ、兄と自分たちの財産が商売で儲けられたものだという事情の方は、忘れがちであった。ビングリー氏は、十万ポンドものの財産を、父から譲りうけた。」(2)
>
> It was no one of the more crowded of those cheep restaurants where the respectable and needy dine in the belief that it is bohemian and the assurance that it is economical. (“ Of human bondage ” 1915)
>
> そこは上品ぶっているが金のあまりない者が気がおけなくて安いというので利用するような安レストランとはちがうところだった（3）

‘ respectable ’の語がどのように訳されていても、原文に示された、その国の階級に対する目線は完全には理解されないだろう。それは‘ respectable ’という英語を、その言語の国の人が見たときに理解されるものであり、つまり日本語にされた時点でほとんど不可能といえる。

2.3. アッパークラスのInnocent

セーラの父Creweはイートン校（Eton）出身である。

> Tom Carrisford, who played cricket at Eton with him.（A little princess）
>
> イートン校（イギリスの名門校）でいっしょにクリケット（十一人が一チームで、木のボールをうちあうイギリス人のすきな競技）をしてあそんだこのカリスフォードが。（谷村　1985）
>
> イートン校でいっしょにクリケットをして遊んだこのトム・カリスフォードを。（伊藤　1956）

なお、このセーラの父の設定は改定版で加えられたもので元の Sara Crew に父の学校は示されていない。ただしEton自体は次のように「いわゆる名門」の意味で一か所みられる。

Hosei University Repository

There was not a child in the nursery, from the Eton boy who was the eldest, to the baby who was the youngest, who had not laid some offering on her shrine.(Sara crew)

この家の子どもは、大学にいる総領から末の赤ん坊まで、セイラを珍重する余りに、何かセイラに献上せぬ者は有りませんかった。（若松　1894）

英国イートン校は実在するパブリックスクールの名門中の名門であり、歴代の首相をはじめとする数多くの著名人を輩出している。今でもイギリスの裕福な家庭では、子供が生まれるとすぐにイートンの入学希望者リストに名前を登録するほどだ。相当の難関校のようだが何より大金がかかる。最近のデータだが2005年年間学費は寄宿費を含めて２万2380ポンド（日本円にして約450万円）。平均的な収入のイギリス人家庭では到底手の出ない額である。作品の時代のEtonは、まさに貴族の子息の学校だった。つまり、セーラはミンチン先生とは違うクラスだったということである。
もパブリックスクール出身で英国の階級問題について多く書いたフォースターは次のように述べている。

彼らはいいことはみんなパブリックスクールのせいにする。パブリックスクールを礼賛して、「ウオータールの戦いの勝利はイートンの運動場のおかげだ」という言葉をすぐ口にしたがる。(4)

フォースターが言う、これがミンチン先生らのセーラの父親に対する目線である。そのような裕福な家の子息のクルーはどんな人物なのだろう。

Captain Crewe was a rash, innocent young man

まだ若くって経験のない人　（若松　1894）
気のはやい、あまり世故にたけない人　（伊藤　1956）
気が早くて世間なれがしていないので　（曽野　2007）
訳出なし　（菊池　1927）

Innocentの形容詞があてられている。Innocentは純粋無垢の意味のほかにexperience（経験）の反対の意味がある。原作者バーネットは、Sara Creweの前に書いたヒット作『小公子』の中でクルーと同じ立場の英国貴族の三男である主人公セドリックの父親について次のように書いている。

he had not been brought up to work, and had no business experience,
是迄の育ちが育でしたから働て活計を立ることには慣ず、事務上の経験も有ませんかつたが

上流階級は、働かないことを美徳とし財産で暮らしている。ただし家を継がない二男や三男など、領地をもてない者は働かなくてはならない。だが経験のない彼らは金を稼ぐ術も管理する術も知らない。
裕福なアッパーミドルの家に生まれたアガサ・クリスティは祖父をなくした後、財産管理人の手にゆだねていた、「あるはず」の遺産が存在せず急に貧窮し、それがもとで父親は病気になり結局亡くなってしまう。

父は困惑し意気消沈してしまったが、もともと事務的な人ではなかったのだからどうしていいかわからなかった。(5)

生活力のない裕福な家の子息が「金」のことで頭を悩まし苦労の果てに病気になるという、クルーやセドリックの父は、このクラスの典型的な人物像として描かれたものである。

Hosei University Repository

2.4. 労働者階級の「Hの音」

物語は裕福だったセーラは下働きのベッキーに同情し優しく思いやる。自分の部屋に呼びお菓子をあげたり、ベッキーにつらくあたるミンチン先生に対してかばったりする。けれど自分が父を失いベッキーと同じ立場におかれたとき「ベッキーみたいになる」ことを恐れる。

> "If I do not remind myself of the things I have learned, perhaps I may forget them," she said to herself. "I am almost a scullery maid, and if I am a scullery maid who knows nothing, I shall be like poor Becky. I wonder if I could QUITE forget and begin to drop my H ” S and not remember that Henry the Eighth had six wives."

> 「あのかわいそうなベッキーみたいになるわ。まるっきり、わすれてしまうなんてことがあるのかしら。歴史がうるおぼえになって、ﾍﾝﾘｰ八世が六人のお妃をもっていたということもわすれてしまうわ」（川端　1961）
> 「そして、もし何も知らないとなれば、わたしはあのかわいそうなベッキイと同じことになってしまう。わたしはすっかり忘れてしまうだろう。そして、歴史のことがうろおぼえになり、ヘンリー八世が六人のお妃を持っていたことなんかも忘れてしまうだろう。」（伊藤　1956）

> 「気をつけないと、習ったことまで忘れてしまいそうだわ。これで、何にも知らないとすれば、ベッキイと選ぶところがなくなるわけだわ。でも、私忘れることなんて出来そうもないわ。歴史の勉強なんか、殊にやめられないわ。ヘンリー八世に六人の妃があったことなんか、忘れられるもんですか。」(菊池 1927）

> 「あたしはまるで下働きみたいだ。そして、もしなんにも知らない女の子になったら、あのかわいそうなベッキーとおなじことになってしまう。ｈの音をおとしてだらしなくしゃべったり、ならったことすっかりわすれてしまって。れきしのことがうろおぼえになり、～」（谷村　1985）

邦訳で「ｈの音」がそのまま訳出されているのは1985年の谷村まち子訳のみである。

「Hの音」を落としたしゃべり方とは、労働者階級が話す、コックニー訛りのことである。英国では言葉遣いは階級差の重要な指標である。話せばクラスがわかるというが、とりわけ「Hの音」を落とすコックニーの言葉は独特で隠せるものではなく、また直るものでもないとみられていた。

コックニー訛りがいかに独特であったかについて、1900年から1903年ロンドンに滞在した夏目漱石は日記に次のように綴っている。

> 日本にいる人は英語なら誰の使う英語でも大概似たもんだと思っているかも知れないが、やはり日本と同じ事で、国々の方言があり身分の高下がありなどして、それはそれは千違万別である。しかし教育ある上等社会の言語はたいてい通ずるから差支ないが、この倫敦のコックネーと称する言語に至っては我輩にはとうてい分らない。これは当地の中流以下の用うる語で字引にないような発音をするのみならず、前の言ばと後の言ばの句切りが分らないことほどさよう早く饒舌るのである。(6)

映画『マイ・フェア・レディ』はまさにそのコックニー訛りを克服する話である。

現代においても労働者階級出身のサッチャー元首相が、訓練して自分の発音をRP（Received Pronunciation：容認発音)というオックスフォード大学、ケンブリッジ大学などパブリックスクールで話されていた英語に変えたことが知られている。

セーラは労働者階級のベッキーと仲良くするも、やはりそのクラスにはなりたくない。この「ｈの音」に対する拒絶はセーラの、そして著者バーネットを含む中産階級の本音である。

Hosei University Repository

貧しい中産階級の家に生まれたオーウェルも次のように言っている。

> 何がどうなろうと。われわれにはHの発音のほかに失うものは何ひとつないのだから

英国階級社会は固定的なものではあり、既定の階級の枠からはみ出そうとすることは「分をわきまえない」ものとして何より嫌われた。だが中産階級は下層の労働者階級と一線を画したく、また機会があれば上流の社会に入りたいという本心を見せたため、上からは疎まれ、下からは軽蔑された。姿勢が見られため上流は中産階級の上昇志向を疎んじたが、下層の労働者階級も、そうした中産階級を軽蔑していた。階級社会の問題を指摘したフォースターはパブリックスクール、キングスクール出身だが、そのキングススクールの附属に通ったという設定のモーム『人間の絆』の主人公フィリップは、労働者階級の中産階級に対する思いを次のように語っている。

> 中産階級の者を羨むことはない。(中略)中産階級の暮らしは堅苦しすぎるのである。それに中産階級の物はひ弱で肉体労働ができないというので少し軽蔑していた。(7)

階級社会の問題は異なる階層同志が一切相容れないところにあった。時の政治家ベンジャミン・ディズレーリは、産業革命期のロンドンにおける貧富の差を描くなかで、相容れない労使の関係を「二つの国民」(the two nations)と呼んでいる。

> Two nations between whom there is no intercourse and no sympathy; who are ignorant of each other ŝ habits, thoughts and feelings, as if they were dwellers in different zones or inhabitants of different planets; who are formed by different breeding, are fed by different food, are ordered by different manners, and are not governed by the same laws ...The rich and the poor. (Disraeli, 1976)（8）

> 二つの国民。その間には何の往来も共感もない。彼らは、あたかも寒帯と熱帯に住むかのごとく、また全然別の遊星人であるかのごとく、おたがいの習慣、思想、感情を理解しない（筆者訳）

以上の背景を踏まえ、再びセーラのセリフの「Hの音」を考えると、これは原作の読者の共感をよぶものとも、また問題意識を掻き立てるものともいえる。原作において意味のある言葉だが、「Hの音」と訳すだけでは原作者の意図は伝わらないだろう。読者に対し、背景の社会事情をどう理解させるかが問われる箇所である。

H音を落とすベッキーのセリフは、原作では文法も語彙の綴りも誤った表記になっており、それだけで他のクラスとの違いは分かる。だがそうした表記の違いを翻訳で示すことは難しい。実際この作品の場合はセーラとの上下関係から敬語的表現が選択され、結果的に礼儀正しく丁寧な表現になっているものが多く、少なくともコックニーの粗野な感じは示されていない。

訳者たちはスラングや訛りをそれぞれ工夫して訳している。ひらがな表記で稚拙さを出したり、日本の方言に変えたりする場合もある。たとえば間もなく刊行予定のミステリーでは次のように訳文に説明が織り込まれている。

> ‘ I want to ask you to stick around ’ , he said. He pronounced it wanna ax.˜
> もうしばらくいっしょにいてくれんかい」あまり教育を受けていない年取った黒人からときに聞かされるしゃべり方で、彼は言った。

> ‘ Plenty big enough to help us out, if you wanted to. ’
> He said it he ’ p.

Hosei University Repository

> そんなにでかけりゃ、おれたちの助けにだってなれるだろ。アンタガその気になってくれればだが「助け」という単語もうまく言えなかった。(9)

翻訳者は、原作に忠実であろうとする。だが、異国の人の生来の意識を伝えることは難しい。なぜならそれは原文に文字で書かれていないからである。階級社会に生きたオーウェルは次のように言っている。

> 階級の違いをなくすということは、みずからの一部を亡くすことに他ならないという事実を覚悟しなければならない。
> 階級制度の枠外へ脱け出すために、個人的な高慢さを抑えるだけでなく、好みの大半や偏見も抑えなくてはならないからだ。…ついには、本来の自分の名残をとどめることはできなくなるだろう（10）

Classを「階級」と訳したとして、そのイメージするものも国によって異なる。翻訳＝原作となりえないのはこういうことに起因するのである。

３．Situationを伝える

外国物を読んで、当該外国の読者と同じように理解するためには、その外国の状況（Situation）を知らねばならない。「イートン」も「Hの音」も、言葉を「きちんと」日本語に置き換えたとして、英国の実情すなわちSituationを知らなければ、その言わんとするところは読み取れない。つまり状況説明が必要ということになる。実際、ある翻訳物（『ミルン自伝 今からでは遅すぎる』）のアマゾンのコメントには「英国の戯曲や詩や散文の作品や作家について、そして雑誌「パンチ」のイギリス社会における意義についての知識と理解があれば、数段楽しめます」といったコメントが寄せられている。だが翻訳者は内容を正確に伝えるだけでなく、あるいはそれ以上に読みやすく仕上げることが求められる。Situationをすべて伝えようとする場合、訳文に説明を補うか、または注釈などをつけることになる。だが、もともと日本人が未知の違和感を抱くような箇所に説明を施すわけだから、結局読みやすさに逆行することになる。そのため現実には状況説明が必要な個所は作品の大意に影響がない範囲で省略されたり変更されたりすることがしばしばある。

しかし翻訳物を手に取る人は少なからず外国の未知の物や人を知りたいと思っている。自分を進化させてくれたのは「翻訳書や洋書の原書が多い」という勝間和代氏は同時に次のように述べている。

> ただ、翻訳書と原書を読み比べると、原書では75事例が40事例に減っていたり、また各事例に日本のケースを補ったものが、蛇足としかいえないようなものが含まれているということがある。(11)

本年６月にでたカールマルクス「共産党宣言」新訳は一文ごとの詳細な解説を含んだ付録資料が400ページに及ぶ。これを訳した的場昭弘氏は「マルクスの著作は実はきちんと読まれてこなかった」述べている。翻訳物は未知との遭遇であり、わからないことを知れる醍醐味がある。よく知っているようなことばかり書いてあるような文章は訳す必要はないともいえる。作品をsituation込みで完全に伝えられたとき、それは原作に翻訳の力が加わり「翻訳物」として国内文学とは別の価値を持ったものになる。目下の課題はそのsituationをどう伝え理解させるかということである。

おわりに

『小公女』など西欧文学がしきりに翻訳されたころは外国へ憧れる気持ちが強かった。だがもはやそういう時代ではない。外国の読み物というだけで単純に惹かれることはなくなった。翻訳物は日本文学との比較からも、とかく読みやすさが求められるようになった。その結果として翻訳物ならではの価値は伝えられていないように思われる。翻訳物を好む人は、たいてい新しいこと、知らないことが知りたくて読むという。また、外国との距離が狭まった今日、外国人の思考を知ることは重要である。実際に外国へ行くことも容易な時代だが、

Hosei University Repository

人の気持ちは目に見えるものではない。それが見たければ、やはり本を読むしかないのではないか。人の思考は、その人の置かれた状況つまりSituationが大いに関係する。米国で絶大な人気を誇る元ニューヨーカー記者のジャーナリスト、マルコム・グラッドウェル氏は「性格とはむしろ、習慣や志向性や関心のたばのようなものであり、それぞれゆるやかに結ばれ、時と場合と背景しだいで変わる」「現にわたしたちは環境だとか、その場の状況であるとか、自分の周囲にいる人々の個性などに大きく左右されている」と書いている（12)。状況とはつまりSituationである。

著名な日本の作家の一人山崎豊子氏は次のように述べている。

> 町を書くときに、その町と人間とが結びついていなきゃ本当じゃない。風土と人間を結びつけないと、書きたくない（13)。

物語はその言葉が生まれたSituationとともに成立している。翻訳物の場合、その作品が書かれた外国のSituationをすべて伝えることができれば和書にはないことがたくさん見えてくるだろう。それらが翻訳物の醍醐味であり、それらを伝える方法を考えることが現在の翻訳物の、そして翻訳者の課題である。まず提供する翻訳者含め出版の側が、その伝え方を検討する必要がある。訳文に説明を盛り込むか、訳注をつけるか。件の電子媒体を利用した新しい方法もあるだろう。だが、同時に受容する読み手の側について、翻訳物をそれとして、和書とは別の物として読める下地が備えられる環境を考えたい。翻訳物の読み方を学ぶ機会を整えるということである。たとえば学校教育の中でなるべく早期に翻訳物の実態を教える。それは翻訳者の仕事を教えることでもある。翻訳物には外国の未知のことが書かれている。見知らぬ国の人が何をどのように考えるのか、なぜそう考えるのかということがわかってくる、そう実感してもらいたい。そうすれば翻訳物は、たとえ小説であっても日本の小説とは全く違うものとして、さらに多くの読者を獲得できるのではないだろうか。

注

参照：邦訳

伊藤整『小公女』新潮文庫　1956
川端康成『小公女』角川文庫　1961
菊池寛『小學生全集第五十二巻　小公女』文藝春秋社　1927
曽野綾子『小公女』講談社青い鳥文庫　2007
谷村まち子『小公女』偕成社　1985
中山知子 『小公女』河出書房新社　1993
村岡華子『小公女』日本書房　1964
若松賤子『セイラ、クルーの話　一ミンチン先生の出来事』少年園　1894

参照：原作

Frances Hodgson Burnett “ A Little Princess ” PROJECT GUTENBERG EBOOK
Frances Hodgson Burnett “ SARA CREWE OR WHAT HAPPENED AT MISS MINCHIN'S ”
PROJECT GUTENBERG EBOOK

⑴　Gareth Stedman Jones p291
⑵　富田彬訳
⑶　行方昭夫訳一中
⑷　フォースターｐ203
⑸　アガサ・クリステイ　ｐ126
⑹　夏目漱石p254

Hosei University Repository

⑺　行方昭夫訳―下ｐ317
⑻　ベンジャミン・ディズレーリ（Benjamin Disraeli, 1st Earl of Beaconsfield, 1804～1881）は、イギリスのビクトリア朝期の政治家。首相にも在任。宿敵ウィリアム・グラッドストンと共にビクトリア期のイギリス政党政治を牽引した。また、小説家としても活躍した。
⑼　Lee Child “ The Hard Way (Jack Reacher, No. 10) ” Delacorte Press　2006　邦訳は近日刊行予定、翻訳はこのシリーズの訳者小林宏明氏のもの
⑽　オーウェル,1995，p.190
⑾　勝間和代ｐ210
⑿　マルコム・グラッドウェルｐ196. ｐ302
⒀　山崎豊子P203

参考文献

アガサ・クリステイ『アガサ・クリステイ自伝』乾信一郎訳　早川書房　1995
アラン・アレクサンダー・ミルン『ミルン自伝 今からでは遅すぎる』石井 桃子訳　岩波書店 2003
安東伸介他編、河合秀和他著1982　『イギリスの生活と文化事典』研究者出版　1982
E. M. フォースター『 ロンゲスト・ジャーニー 』川本静子訳　みすず書房　1994
勝間和代『読書進化論 : 人はウェブで変わるのか。本はウェブに負けたのか』小学館新書2008
ジェイン・オースティン『高慢と偏見』上、下巻、富田彬訳、岩波文庫 1994
ジョージ・オーウェル『ライオンと一角獣』川端康雄編　平凡社ライブラリー　1995
ジョージ・オーウェル『ウィガン波止場への道』土屋宏之,上野勇訳　ちくま学芸文庫　1996
ジェフリー ウォルフォード『パブッリク・スクールの社会学』竹内 洋・海部優子訳世界思想社　1996
夏目漱石『倫敦消息』夏目漱石全集10所収　筑摩書房　1988
バートランド・ラッセル『怠惰への賛歌』　堀秀彦・柿村峻訳　平凡社　2005
林 信吾『しのびよるネオ階級社会―“ イギリス化 ”する日本の格差 』平凡社 2005ｐ122
マルコム・グラッドウェル『ティッピング・ポイント―いかにして「小さな変化」が「大きな変化」を生み出すか』高橋 啓訳　飛鳥新社　2000
山崎豊子『小説ほど面白いものはない』新潮社2009
Burnett, Vivian, The Romantick Lady: Frances Hodgson Burnett, the Life Story of an Imagination. New York: Scribner's, 1927.
Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield. “ Sybil, or, The two nations ” AMS Press, 1976
Bertrand Russell “ In praise of idleness, and other essays ” Geprge Allen & Unwin Ltd.　1935
C. Hugh Holman “ A HANDBOOK To Literature. Indianapolis ” The Odyssey Press, 1972
David Feldman and Gareth Stedman Jones　“ Metropolis, London : histories and representations since 1800 ” Routledge , 1989
Jane Austen “ Pride and Prejudice ” PROJECT GUTENBERG EBOOK　1813
William Somerset Maugham ‘ Of human bondage ’ New York : Modern Library 1915